倉掛のぞみ園

特　別　養　護

倉掛のぞみ園は、閑静で居住環境の良好な安佐北区高陽ニュータウンの一角にあり、被爆者の方々が安心して心豊かな生活を送っていただくことができるよう、クラブ活動室や陶芸設備のある機能訓練室、シャワーベッドをはじめ最新の設備を備えるなど居住性に配慮されており、平成4年（1992年）7月に入園定員300人の特別養護施設として開設され、平成8年（1996年）4月から定員4人のショートステイも実施している。

所在地：〒739-1743　広島市安佐北区倉掛三丁目50番1号
（TEL 082-845-5025）
（FAX 082-845-6934）

原爆が残した傷

朝枝逸子（八十二歳）

被爆地……比治山町（爆心地より一・五㎞）
当時の急性症状……火傷・下痢・嘔吐
家族の死亡……なし
現在の病状……腰部脊柱管狭窄症・虚血性心疾患

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は段原にあった広島女子商業学校の一年生でした。その日は、学徒動員で鶴見町に行き、瓦の片付けをしていました。

その当時は、白い服を着ると敵に狙われるので、草を摘んできて、服を草色に染めていました。

原爆が投下される直前は、Ｂ29が飛んでいました。原爆投下直後、辺りは真っ暗になり、息をするのがとても苦しかったことを覚えています。次第に明るくなって周り

を見ると、一緒にいた友達は、吹き飛ばされていなくなっていました。私は、身体全体に火傷を負い、服はボロボロで皮膚は垂れ下がっていました。瓦を片付けるのに下を向いていたせいか、顔は火傷をしませんでした。

私は、一人で瓦礫の山となった広島の街を歩き廻り、なんとか尾長にある家に辿り着きました。家は壊れていましたが、家に居た母は、幸いにも無事でした。

家に着いた時、喉が渇いていたので、母が水を飲ましてくれましたが、水を飲んだ後、下痢・嘔吐を繰り返しました。

それから、終戦までは、近所の方に助けられ、竹藪に蚊帳を張って生活しましたが、食べる物もなく、梅干しだけの生活が続いたこともありました。

火傷をした右腕は、手を下ろすと膿がダラダラと流れるので、三角巾で吊っていました。薬もないので食用油を塗っていました。

火傷の跡はケロイドになったので、それからは、ケロイドを隠すために、半袖の服が着れませんでした。今でも、半袖の服は着ていません。

今、私は倉掛のぞみ園で生活していますが、平和学習で来られる生徒さんに、被爆体験を語っています。若い人達に、戦争は絶対にしてはいけないことを伝えていきたいと思っています。

ボロボロに燃えたワンピース

新井　スヱ子（七十七歳）

被　爆　地……牛田町（爆心地より二・三㎞）
当時の急性症状……右半身の火傷
家族の死亡……なし
現在の病状……変形性腰椎症

被爆時の状況及びその後の生活

その日は、天気の良い日でした。

当日、私は体調が優れず、学校に行きたくなかったのですが、姉に行きなさいと言われて学校へ行きました。

運動場で、友達四、五人と、地面に絵を描いたり砂遊びをしていると、突然、柳の木がグラグラと揺れて、すごい風が吹きました。

私の着ていた半袖のワンピースは、燃えて破れてしまい、履いていた下駄の紐も燃

えていました。右の手や足に火傷を負いました。

しばらくして姉が迎えに来てくれて、牛田の山に逃げました。山から街を見ると、すごく燃えていました。逃げてきた兵隊さんが、「水が飲みたい、水が飲みたい」と言って死んでいきました。

私は、右手の火傷がひどく、看護婦をしていた叔母に手当てをしてもらっていました。

湧いてくる蛆虫を取ってもらったり、薬の代わりに油を塗ってもらいました。とても痛く苦しかったです。火傷が治ってからも、傷跡を隠すために包帯をしていました。

その後は、夜間高校に行きながら、昼は洋裁の仕事をしました。三十歳を過ぎて病気になり、結婚することもなく、兄妹の助けを借りながら暮らしました。

今は、倉掛のぞみ園に入って、食事も美味しく、楽しく過ごしています。ここに入園出来て良かったです。

あのような戦争は、もう二度と繰り返して欲しくありません。

夫へ、私は元気ですよ

岩本　ミツコ（九十五歳）

被　爆　地……入市（八月七日・広瀬北町）
当時の急性症状……なし
家 族 の 死 亡……夫・義父・姉
現 在 の 病 状……高血圧症・狭心症・心房細動

被爆時の状況及びその後の生活

当時、二十五歳の私は、主人と一歳になる娘の三人で八木に住んでいました。主人を勤めに送りだした後、娘を部屋で遊ばせておりましたところ、襖に大きな玉のような光が入って来てびっくりしました。三菱に爆弾が落ちたのかと思いました。

そのうち、可部の方へ逃げて行く人が、家の前を通るようになりました。みんな、服を着ているようには見えませんでした。当時は、白い服は上空から見え易いからと、黒っぽい服を着るようにと言われており、黒い服が光熱を通しやすいので、服の殆ど

が焼けたのかも知れません。

行方不明になっていた主人は、四日後に見つかりました。建物の下敷きになっていたのを、一緒に行った主人の弟が探し出してくれました。身体は原形をとどめず、顔は腫れて別人のようであり、臭いもひどかったです。

広瀬で火葬して、家に連れて帰ってくれました。

義父は爆弾が落ちた時、八丁堀にいたそうで、全身に火傷を負いながら、八木まで歩いて戻って来ました。義母は吉舎に避難していましたが、広島の様子を聞いて戻り、義父と再会しましたが、二日後、義父は亡くなりました。

仁保町にある私の実家では、私の姉が帰って来ないと、家族が探していました。結局、姉は行方知れずで、遺骨もありませんでした。

当時、身体が弱かった娘ですが、今ではインターフェロンを使用したせいか、現在は元気にしています。私は、娘が面会に来てくれるのを、とても楽しみにしています。

最近、物忘れをすることも多い私ですが、建物の下敷きになっていた主人の姿は、今でも忘れることはできません。

大切な人を探して・・

大倉節子（九十二歳）

被爆地……入市（八月七日・猿楽町）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……夫
現在の病状……高血圧症・高脂血症・骨粗鬆症

被爆時の状況及びその後の生活

昭和十九年、私は二十三歳でした。軍人であった父の勧めで結婚が決まっていたところ、相手の方に三月十七日付けで召集が掛かったため、急遽翌日の十八日に式を挙げました。

主人は、広島城にあった大本営（第十一連隊）に入隊し、時々外泊をしたりしていました。

昭和二十年八月六日、私は、主人の里である坂の親戚の家に居ました。縫っていた物が爆風で吹き飛び、外を見るときのこ雲が見えました。その時は、ガス会社が爆発

したのかと思いました。
幸い、私は無傷だったので、翌七日には、市内の大本営へ主人を探しに向かいました。
相生橋の手前から護国神社にかけての川沿いでは、無数の人の死体があり、それらを焼いていました。また、福屋の地下には、水が溜まって人がプカプカ浮いており、顔が腫れ上がって男女の区別もつかないほどでした。
八月八日にも、避難場所になっていた牛田の小学校に主人を探しに行きましたが、結局見つけることが出来ず、今でも遺骨も遺品もありません。
その後、自分の里である中山に帰り、家の手伝いをしながら過ごしました。
今は、あちこち体の悪い所はありますが、倉掛のぞみ園に入り、また、色々と良くしてくれる義理の妹の協力もあり、毎日穏やかに生活しています。このような平和な日々が続きますよう祈ります。

大本営跡
爆心地から約910mの大本営跡。後方の山は牛田山。南から北東に望む。
（川本俊雄氏撮影／川本祥雄氏提供）

私の一生忘れられない事

大越　サトヨ（百一歳）

被　爆　地……己斐町（爆心地より三・〇km）
当時の急性症状……なし
家　族　の　死　亡……なし
現　在　の　病　状……高血圧症・慢性心不全

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は三十一歳で宇品陸軍糧秣支廠の会計課に勤めていました。宇品は危険だからということで部署が分散されて、会計課は己斐小学校で仕事をしていました。

原爆投下のときは、小学校の教室の左の角がパァーッと光りました。一緒にいた兵隊さんが、「爆弾が落ちた」と言ったので、毎日一時間ずつ掘っていた運動場の向こうにある防空壕に、皆で走って逃げました。黒い雨がザァーと降って来て、防空壕は裸足で逃げて来る人で一杯になりました。

ガラスが刺さった布団を被っている人や、ガラスが背中に刺さった人もいて、婦長さんが、一人で走り廻っていましたので、私は消毒するのを手伝いました。バケツ一杯の消毒液が、すぐに真っ黒になりました。

私の知人も、奥さんを抱えて逃げて来ましたが、奥さんのお腹が破れて子宮が見えていました。皆、火傷をしていて、「水をちょうだい」と言っていましたが、兵隊さんから、「水をやると、お腹がパンパンに膨れてしまうから、やってくれるな」と言われてあげられませんでした。

私の同僚は、弟が国泰寺中にいるからと言って探しに行き、己斐橋で見つけて一緒に戻って来ましたが、暫くして亡くなったので、小学校の庭で遺体を焼いていました。

別の同僚は、宇品から己斐に行く途中に、電車内で被爆して死んでしまいました。

本庁へ戻ると、「アメリカが来たら、大変なことになる。女子は早く里へ帰れ」と言われたので、実家がある能美島に帰り、その後は、体調を崩すこともなく、結婚して穏やかに暮らしました。

どうしてあんなことになったのか。たくさんの人が殺され、友達も死んでしまい、戦争なんかしてもらいたくなかったです。

十一歳の出来事

岡田君子（八十一歳）

被　爆　地……打越町（爆心地より一・八km）
当時の急性症状……なし
家 族 の 死 亡……父・兄・弟
現 在 の 病 状……気管支喘息・変形性脊椎症・甲状腺機能低下症

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は十一歳で、両親と兄弟姉妹七人で、打越町に住んでいました。その日は、頭が痛くて学校を休み横になっていました。

トイレに行こうと外に出た時、「何か光った」と思った瞬間家の下敷きになっていました。必死で身体の上の物を払いのけ、運良く出ることができました。家の中にいた母も下敷きになり、胸の上には大きな梁が落ちていました。どのようにして助け出したか覚えていませんが、一人で助けることができました。家に居た一番下の妹も、

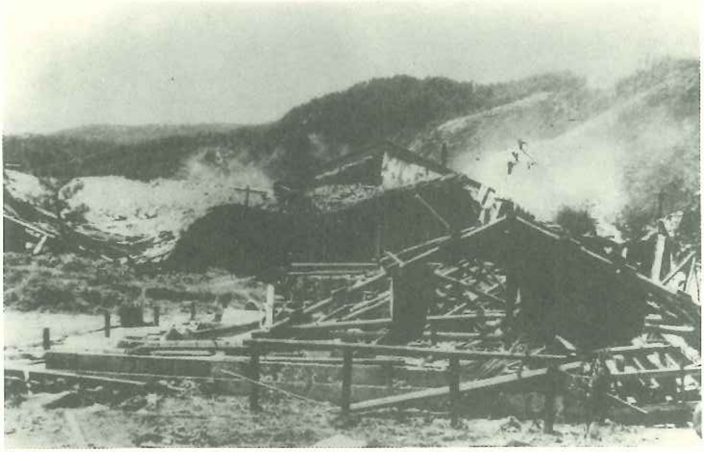
裏にある畑まで飛ばされているのが見つかり、助けることができました。

父は、その日、空襲警報が鳴っていたので、母から仕事に行くのを止められましたが出かけてしまいました。その後、行方が分からず、母が毎日毎日探しましたが、とうとう分かりませんでした。兄と弟は、父の使いで出かけていてひどい火傷をして帰ってきましたが、次の日の朝亡くなりました。皮膚も服も垂れ下がった状態で帰ってきたのを、今でも忘れることができません。

なんとか助かった母や弟達皆で、畑に蚊帳を張り寝起きしました。畑のカボチャや父が防空壕に埋めていた食べ物を食べ、助かりました。両親が大事な物を入れていたスーツケースが、瓦礫の中から見つかり、通帳などがあったので、母と田舎に食べ物の交換に出かけなんとか生活できました。知り合いの人達の助けもあり、バラックを建てることができました。母は、当分の間は気が張っていましたが、落ち着きだして具合が悪くなり、一か月くらい寝込みました。その時洗面器一杯位の血を吐いた後、不思議なくらい元気になりました。

私は、弟や妹の面倒をみて、勉強するゆとりはありませんでした。その後は、母の商売の手伝いをしていました。縁があり岩国に住んでいた方と結婚し、四人の子供に恵まれ、主人と一生懸命働いてきました。

今は、首から頭にかけて熱くなるので、アイスノンをして休んでいる状態ですが、子供達がのぞみ園に来てくれることを楽しみに生活しています。



広島第二陸軍病院三滝分院
爆心地から2500mの地域で、建物の全壊は80％という。
（川原四儀氏撮影／広島平和記念資料館提供）

原爆の思い出

川手　キヨコ（九十六歳）

被　爆　地……入市（八月十五日・松原町）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……弟
現在の病状……高血圧症・変形性膝関節症

被爆時の状況及びその後の生活

八月六日、私は子供二人と一緒に、実家である白木町志路におりました。その日は、子供を病院へ連れて行くため、着替えをしていたところ、遠くの空がピカッと光るのが見えました。その時は、何が起きたのか分かりませんでした。

翌日、私の自宅（本川町）から鉄工所に勤めていた弟が、被爆したため、消防署員に連れられて志路に帰って来ました。

身体には、水膨れの段階を超えてえぐられたような火傷があり、「水、水・・」と

言いながら、一週間苦しんだのち亡くなりました。
人から「広島は全滅したらしい」と聞き、十五日、子一人を背負い、もう一人の子の手を引いて出かけました。途中の戸坂で汽車から降ろされて、歩いて自宅のある本川町へ向かいました。
家や防空壕に置いていた食べ物、衣類、何もかもが、跡形なく焼けていました。仕方なく矢賀まで歩いて、そこから汽車で志路まで帰りました。
私達親子が居ることで実家に迷惑がかかると思い、父から近くに家と田畑をもらって、ささやかな生活をして暮らしました。
話しが前後しますが、私の主人は、結婚後僅か半年で支那事変に召集され、無事に帰国しましたが、昭和一九年七月、再びマニラに召集されました。何月何日に亡くなったのかも不明で、遺骨もなく、軍服の切れ端だけが日本に帰ってきました。その切れ端を墓に弔いました。
その後の生活は、大変なことも多かったのですが、今は、倉掛のぞみ園で穏やかに暮らしており、美味しいご飯も頂いて、とても有り難く思っています。
子供二人も近くに住んでいて、曾孫も八人おり、皆が良く面会に来てくれるのが、嬉しいです。原爆も戦争も、二度とあってはいけません。

生きる

木村秋子（八十四歳）

被　爆　地……横川町（爆心地より一・五㎞）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……母・姉
現在の病状……パーキンソン病

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は十四歳でした。母と姉と三人暮らしで、中広に住んでいました。

六日の朝、私は、いつもと変わらず建物疎開の為元気よく出掛け、横川で作業をしていました。その日は朝からＢ29が上空を何機か飛んでいるのが分かりましたが、警報も鳴らなかったので特に気にすることもなく、皆と力を合わせて作業をしていました。

すると突然、強い光と風を感じたかと思った瞬間、何が起きたか全く分からず気を

失っていました。気がついて目をあけた時は、驚きました。いつも見ていた風景ではなく、建物は崩れ火を噴き、人は黒こげになっていたり、火傷で皮膚が垂れ下がっていたりで、男か女か全く分からない状態でした。本当に生き地獄のようでした。私は、たまたま建物の陰になっていたため、大きな傷もなく無事でした。友達は何処にいるのか分かりませんでした。

右も左も分からない状態で炎の中をくぐりぬけ、家を目指しました。家の前に着くと、そこに家は無く、真っ赤な火があるだけでした。周りのありとあらゆる所から真っ赤な炎が上がり、黒い煙でいっぱいでした。「母ちゃん、姉ちゃん」と何度も呼びましたが返事はなく、燃える音と風の音しか聞こえませんでした。私も、寂しさから死を考えました。

しかし、母と姉に会いたいという思いが強かったのか、なんとか周りの人々に助けられ、今日まで生きてくることができました。

未だ、母と姉には会えてはいませんが、私の心の中には、いつまでもあの時のままの母と姉の姿に生きています。

あの時のことを思い出すと、今でも涙が出ます。忘れたいと思うけれども、忘れられない出来事です。それでも、私は前を向いて生きてきました。

とにかく戦争は止めなさい

中村久子（九十七歳）

被爆地……宇品町（爆心地より四・一km）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……なし
現在の病状……高血圧症・変形性膝関節症

被爆時の状況及びその後の生活

当時、二十七才の私は、宇品で旅館の仕事をしていました。六畳が二つ、四畳半が一つ、三畳が一つの旅館でしたが、空襲に備えて一階の別の部屋は畳をはぐって地下に潜れるようにしていました。広島の空はB29がうろうろしていて、七月二十四日には、八月の五日と六日が危ないというビラが撒かれたと言う人もいました。

鷹野橋では木造住宅をばらして木材をくって集めており、前日五日はその手伝いの日でした。夕方四時までのところを二時で終わりにして帰りました。その日は旅館

の客もいなかったので、早い時間に寝ました。

六日の朝、茶の間で芋粥を食べていたら、「ピカッー」、「ドーン」と音がしたので、防空頭巾をかぶり床に伏せました。顔を上げると、窓ガラスは割れて滅茶苦茶になり、戸棚や箪笥の引き出しも開いて、どうなったのか訳が分からなくなっていました。「退避」の声が聞こえたので、みんなで防空壕に避難しました。

そのうち、町内の人が戻って来て、「あれは新型爆弾じゃ。産業奨励館に落とされたらしい」と言っていました。

「退避解除」の命令で表に出ると、火傷をした人が、大きなトラックでどんどん運ばれてきました。宇品に来る途中で亡くなる人もいて、死んだ人と生きている人を分けなければいけませんでした。死んだ人は、夜中に石油をかけて焼きました。「水は絶対に飲ますな」と言われましたが、「欲しい、欲しい」と言う人がいたので、ハンカチを三角に折って、その先を水に浸して、何度も口に吸わせてあげました。辺りの川は、死体でいっぱいでした。水が欲しくて入った人もいたのでしょう。

その後、私は、旅館の仕事は辞めて、舟入に引っ越しました。飲食店やビルの掃除の仕事をしながら、町内の世話係をして生活しています。今は、「とにかく戦争は止めなさい」と子供達に伝えています。

戦後からの足跡

深田　幸（九十一歳）

被　爆　地……入市（八月十二日・猿楽町）
当時の急性症状……なし
家　族　の　死　亡……なし
現　在　の　病　状……逆流性食道炎・心不全

被爆時の状況及びその後の生活

当時、我が家は富士見町にあり、洋服の仕立てをしていた夫と長男と生活しておりました。当日、私と長男は高宮町の叔母の家に疎開をしており難を逃れました。

八月十二日、呉の義理の兄と一緒に、夫を探しに市内に行きました。家は焼けていて、夫を見つけることは出来ませんでした。人づてに、「材木屋の引越しの手伝いに行って、其処に避難している」と聞いて、生きていることだけは分かったので、一旦高宮町に戻りました。

八月十六日、再度市内に行きましたが、辺りは焼け野原で、怪我をした人、ブリキの上で手を合わせて拝んでいる人がたくさんいました。皆、男女の区別も付かない酷い有様で、恐ろしくて膝がガクガク震えました。

数日後、義理の兄が夫を見つけてくれたので、長男を連れて呉まで行き、会うことができました。それから、大八車に荷物を積み、一家で船越にある日本製鋼の社宅へ移りました。長女と次男が生まれ、親戚にも頼れず、生活は難儀でした。

その後、基町へ移り住み、夫は洋服の仕立てを再開し、私は保険の外交や学校の寮母などをして、ずっと働きました。

猿楽町（西向寺北、猿楽町通り）西から東に向って。

爆心直下のこの町は、木造住宅の密集した地区のため町は壊滅したが、わずかに通りの両側の防火水槽がかつての町の痕跡をとどめた。中央の通りが猿楽町の通りで、通りを挟んで左から福屋旧館、福屋、芸備銀行本店、千代田生命広島支店、三和銀行広島支店。焼け跡左猿楽町、右手前細工町、大手町一丁目など。爆心地から約910mの大本営跡。後方の山は牛田山。南から北東に望む。

（林　重男氏撮影／広島平和記念資料館提供）

今は、長男は北九州で、長女と次男は広島で元気に暮らしています。長女は、良く面会に来て、面倒を見てくれます。

何とか今まで生き延びて、倉掛のぞみ園にも入れて穏やかに暮らしています。これからも、ずっと此処に居させてもらいたいです。

平和な毎日が続きますよう祈っています。

四歳だった私

三王光子（七十三歳）

被爆地……金屋町（爆心地より二・〇km）
当時の急性症状……下痢
家族の死亡……義姉
現在の病状……脳梗塞（右片麻痺）・高血圧症

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は、四歳でした。父と母は再婚同士で、父の連れ子である義理の姉と、母の連れ子である実の姉と、私の五人家族で暮らしていました。母のお腹には弟がいました。

私達家族は、昭和二十年の春に、東京から母の実家のある広島へ戻り、段原小学校の裏（金屋町）に家を借りて、生活していました。

その日の朝、父は、東洋工業へ仕事に行っていました。二人の姉達は、二階で朝食

を食べていました。私は、母と一階に居て、缶詰の缶を積んで遊んでいました。東京にいた時、父が日本水産に勤務していたので、家には缶詰がありました。

あの時のことは、一瞬の出来事で、何が起こったのか殆ど記憶にないのですが、家の壁は崩れ天井が落ちた状態でした。その壁に挟まれ、義理の姉が亡くなりました。母と実の姉と私は助かりました。外を見ていると、市内の方から、徐々に家が倒れ街が燃えていくのが見えました。

その後、私達家族は、救護のトラックに乗せてもらい避難しましたが、何処に避難したのか記憶がありません。何日かそこで生活しましたが、下痢がひどかったことを覚えています。

暫くして、金屋町に戻り、焼け残ったトタン等を利用して、バラックで生活していました。その後、牛田の母方の親戚が持っていた長屋で生活を始めました。母が九月に弟を出産し、五人家族での生活になりました。食べ物も服も少ない苦しい時代でした。これが私のあの当時の記憶です。

今、私には、孫や曾孫がいます。孫達の笑顔を見ていると、あの当時のような体験は絶対させてはいけないと思います。

今、命ある幸せ

村田ミコノ（九十歳）

被　爆　地……宇品町（爆心地より四・一km）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……なし
現在の病状……発作性心房細動・糖尿病・慢性心不全

被爆時の状況及びその後の生活

当時、二十歳の私は、宇品の暁部隊で食事の世話をしておりました。倉庫でじゃが芋の皮を剥いていたら、突然強い風と共に砂煙が上がり、何が起こったのか訳が分からず、建物の中から裏の芋畑へ飛び出しました。私も友達も、幸い大きな怪我もなく顔が煤で真っ黒になる程度で済みましたが、別の部隊にいた小学校の同級生は亡くなったと、後で聞きました。

暫く経って、通りを避難してくる大勢の人がいて、その人達の傷の手当をするため

兵隊さん達の手伝いをしました。その間も違う飛行機の飛ぶ音がして、生きた心地がしませんでした。この日、父母が私を迎えに来る予定でしたが、海田（大正橋）の辺りで前へ進めず引き返したそうです。

その晩、寮がある丹那町に帰る途中何処からともなく聞こえた、「誰か、助けて下さい」と呼ぶ声が今も耳に残っています。

また、十日位経って友達と市内を歩いていた時のことです。一面焼け野原で、一軒の家もありませんでした。その中を、子供がお婆さんの後を付いて歩いており、お婆さんは、「この子は何処の子じゃろ。後を付いて来る。困ったもんじゃ」と言いながら歩いていく姿を見かけました。その光景も、今だに思い出します。

八月末、父と母がようやく迎えに来てくれ、皆で一緒に里（熊野町）に帰りました。里では、赤痢が流行ったとかで、沢山の人が亡くなりました。

その後、私は、黒瀬町の人と結婚し、農繁期には百姓の手伝いをしながら筆を作って販売し生活してきました。平成十七年に夫が亡くなり、自分の体も思うように動かず何も出来なくなったので、黒瀬町の施設に入所しました。平成二十四年六月に、倉掛のぞみ園に入園させてもらいました。ご飯は美味しいし、職員さんも良くしてくれて、今はとても幸福に生活しています。

こんな目におうて

山口英子（九十一歳）

被爆地……中広（爆心地より一・四㎞）
当時の急性症状……火傷（右肩・腕）
家族の死亡……母（入市から三か月後）
現在の病状……高血圧症・慢性C型肝炎・メニエル症候群

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は二十二歳で、父と中広に住んでおり、病弱だった母は吉田に疎開していました。自宅の庭で草むしりをしていると、突然ピカッと光って、ドカンと音がし、気が付くと家が倒れ燃え始めていました。倒れた家で右肩と腕に火傷をしましたが、夢中で山に向かって逃げました。心配した父が、仕事からすぐに戻ってくれ、背負われて一緒に山へ逃げました。途中、死体をかき分けながら逃げましたが、人々の「助けて」、「痛い」と言う声が、今も耳から離れません。

山へ着くと黒い雨が降り始め、木陰で雨をしのぎ、親戚のある祇園へ逃げました。道中も、死体や怪我人がいっぱいでした。祇園で医者に診てもらい、水を欲しましたが、「飲むと死ぬ」と言われ、飲ませてもらえませんでした。それでも懇願し、一杯だけもらいましたが、その時の水は本当に美味しかったです。

その後、父の実家がある玖村へ歩き続けました。市内ほどではありませんが、怪我人がいて、皮膚がむけて、「寒い」と言っている人もいました。

私の看病のため母が吉田から来てくれ、原爆から数日後には、父と母と一緒に家の後片付けのため中広に戻りました。自宅は跡形もなく全て焼けており、近くにバラックを建てて暮らしました。原爆の影響か、母は、三か月後に体中が紫色になって亡くなり、怪我のなかった父も、数年後には原爆症で亡くなりました。

あの時代は、誰かと一緒でなければ生きられませんでした。子供や孫には辛くて原爆のことを話していませんでしたが、この年まで生きさせてもらった私達には、被爆を語る義務があると思います。

長生きすることができ、私は今幸せです。

被爆体験を後世に

米田君枝（九十五歳）

被爆地……江波町（爆心地より三・四㎞）
当時の急性症状……発熱
家族の死亡……なし
現在の病状……不安神経症・甲状腺機能低下

被爆時の状況及びその後の生活

被爆当時、私は二十五歳、長男三歳、夫は二十九歳で満州に出兵していました。夫の実家は、江波で牡蠣の養殖業を営んでおり、結婚して半年後に分家してもらい、主人と二人で切盛りしていました。暫くして戦争が激しくなり、夫が召集されました。

当日、私は、建物疎開に行く予定でしたが、熱があり体調が思わしくなかったので、叔母の家で子供と休んでいました。何かが光ったと思ったら、一瞬にして暗くなり、ものすごい揺れと音がしました。何が起こったのか分からず、とっさに子供を庇っていました。

気が付くと、私の左手には壊れた窓ガラスの破片が突き刺さり、出血していました。

子供を叔母に預け、治療のため陸軍病院に行きました。私自身の治療はしてもらえましたが、その後、広島市内各所から、火傷され皮膚が垂れ下がった方々が、続々と避難されてきました。蟻が餌に群がるが如く、病院を取り囲んでいました。治療を受けることもなく亡くなられる方が、沢山いらっしゃいました。

私は、叔母の家に戻りましたが、四十度近い熱が十五日間続きました。叔父と叔母が井戸水を汲み体を冷やしてくれたおかげで熱も下がり、普通に生活できるようになりました。

食料のない時代でしたが、船が無事でしたので、船で島に食料を買い付けに行っていました。牡蠣の養殖はなんとか再開でき、夫が翌年の春復員するまで、頑張ることができました。

昭和二十二年に次男が生まれ、順調に生活することができました。子供が学校に行くようになると、ＰＴＡの役員、民生委員、保護司の仕事、また、被爆者の権利擁護の運動をさせていただきました。その仕事を通じて、被爆者の思いを伝えるとともに、核兵器のない社会、戦争のない社会を目指すよう、呼び掛けてきました。今後も、この思いを次世代に繋いでいかなければならないと思っています。

核兵器のない、平和な世界になりますよう祈って止みません。